

## 5 モームは皮肉でシニカルか\*

近年、**サマセット・モーム** (William Somerset Maugham, 1874-1965) の作品が再び読まれるようになったのは喜ばしいことである。しかし例の「通俗的、皮肉でシニカル、残酷」といった評価はそろそろ打ち止めにしたい。モームを「通俗的」と評する場合、それが「分かりやすく誰でも楽しめる」という意味ならば問題はない。しかし実際は「単なる大衆小説家、低俗」という意味になる場合が多い。こうしてモームの作品には悪い意味での「通俗」のレッテルが貼られ、人間の不可解性を追求し、信仰を失った現代人の生き方を模索するという純文学的な面は軽視されることになった。このような傾向は特に日本の英文学界で顕著であり、例えばジェームズ・ジョイス (James Joyce, 1882-1941) のような難解な作家が珍重されるのとは極めて対照的である。日本の英文学界には、昔から分かりやすいと「純文学 (研究対象) ではない」という風潮があって、論文でも時に「わざと難しく書く」のが推奨されたりもするのだが、モームのように言辞を弄するのを嫌い、分かりやすく面白い作家の場合はそれもやりにくい。というわけでモーム (のようなタイプの作家) が軽視されてきたのも、ある意味で止むを得ないことだった。そんなことをしているうちに、日本の英文学研究はひどく衰退してしまったのだが、このような風潮はモームのよき理解者の発言にまで影響を与えたようである。

例えば**中野好夫**はモームの作品を「通俗的・皮相」と評し、「所謂絵模様の人生哲学も『皮相』の批評を免れるものではない」(7) と述べた。勿論中野の真意は「モームの作品は一切の通俗性の皮を剥ぎ取った最後に、人間の不可解性という、常に最後の核にぶつかる」(8) というところにあり、つまりモームを高く評価しているのだが、それでも中野はモームのことを少々「通俗的・皮肉・シニカル」などと言い過ぎたかもしれない。モームの作品に、19世紀までの作家の重厚さや20世紀の作家の実験性があり無いのは事実である。しかし、だからと言って、それが作品の内容や文学的主題の不当な評価、或いは等閑視に繋がるのはおかしい。文体や実験は手段であり、それ自体が目的ではないからだ。従ってモームの通俗的側面については「純文学的な主題を扱いながら、よい意味での通俗性も兼ね備えている」と評するべきである。

勿論モームは『丘の上の別荘』(*Up at the Villa*, 1941) や短篇「ランチョン」(“The Luncheon,” 1924) などのような純娯楽作品も数多く書いたが、それらについては「只管面白く、時には爆笑させてくれる作品も書いた」と評するのが正しい。また

作家を評価する場合はその最良の部分で評価すべきだ。

モームの作品はしばしば「皮肉・シニカル・残酷」とも評されるが、これも少し度が過ぎる。勿論「皮肉」な作品もあるが、それは小川和夫が言うように「このアイロニーは、作者が人生を白眼視しているからではなく、人生そのものがアイロニカルなので、モームの眼がそれを苦もなく見抜いてしまったところに生まれた」(7)のものであろう。この「アイロニー」という言葉はモームの場合、殆ど「シニカル・残酷」と置き換え可能だが、つまり人生そのものが時にアイロニカルで、シニカルで残酷なのであり、そういう運命の不条理にモームは敏感であった。故に例えば短篇「サナトリウム」(“The Sanatorium,” 1938)などのように、運命に翻弄される人物を描く時のモームには優しさを感じられることも多い。更にモームには生真面目な面さえある。

モームは幼少時代に信仰を失った。そして「神無き人生の意義とは何か」ということを考え続け、宗教に代わる現代人の行動理念を模索した。彼が辿り着いた結論は例の「**絵模様の哲学**」(*The philosophy of Persian carpet*)だった。これを一言で言えば「各人は自らの性質と仕事に応じて行動すべし」=「汝の欲することをなせ」ということになる。従って当然「虚無的」「皮相」といった批判も出るわけだ。しかし『サミング・アップ』(*The Summing Up*, 1938)でも触れられているように、偉大な哲学者達でもこの問題に完全な答を出すことは出来なかった。「絵模様の哲学」はその上でのモームの結論なのであり、そこから彼は「たとえ無意味であろうと、自由に織り成すことの出来た人生はそんなに悪いものではない」と人生を肯定しようとする。勿論「絵模様の哲学」も本質的な解決に繋がるものではない。しかし、この問題に完全な答など存在しない以上、「絵模様の哲学」は現代の「幸福論」も兼ねるものであり、「宗教に代わる行動理念」の1つとしてもっと評価されてよい。

結局のところモームは、英文学界などで言われるほど通俗的な作家ではない。また皮肉でシニカル、皮相で残酷でもない。彼の評価に於いてはいつでも「面白さ」と「分かりやすさ」が災いする。しかし徒に「難解さ」を崇拜し、モームのような作家を貶める土壌が今日の英文学研究の衰退を招いたとも言える。そんなこともあってモームの再評価を試みてみた。

\* 本稿は「モーム再評価の試み」(*CAP FERRAT* 第7号, 日本モーム協会, 2010年)を改稿したものである。